（第 12 号様式）

学 位 論 文 の 要 約
（ 研 究 成 果 の ま と め ）

氏　　名　山本　英一

学位論文名　５歳以上の年長児発症の川崎病の臨床的検討

学位論文の要約

＜はじめに＞

川崎病は、乳幼児に発生する全身の血管炎で、いまだ原因不明である。日本においては、年間約 1 万人の患者が発生し、年々増加傾向にある。川崎病の発症年齢は、多くが 5 歳未満で 1 歳がピークである。急性期におこる冠動脈病変が問題になり、約 10%の川崎病患児が冠動脈の拡大や瘤に発展する。

一方、5 歳以上の年長児の発症頻度は川崎病全体の約 12%と少ない。年長児の発症例は臨床症状、治療反応性などにおいて 5 歳未満の発症と異なる経過をとることが多く、心血管合併症発生の危険因子であるといわれている。今回の研究では、単一施設で集積した川崎病年長発症例における臨床像、治療経過、後遺症の発生について検討しその特徴を明らかにした。

＜方法＞

2008 年から 2014 年の間に愛媛県立中央病院にて川崎病と診断され入院した 200 名の患児を後方視的に検討した。年長児群（5 歳以上で発症した症例）（n=21）と対照群（5 歳未満で発症した症例）(n=179)について、臨床症状、重症度、検査所見、治療、心冠動脈合併症について比較検討を行った。

＜結果＞

川崎病の主要症状である 6 項目の発現率は、年長児群と対照群で有意差は認められなかった。一方、川崎病の診断の参考項目ではあるが比較的特異な所見である BCG の接種部位の発赤・腫脹に関しては、対照群と比較して年長児群では全く認められなかった。主要項目が 4 項目以下の不全型の症例数においても、両群に有意差は認められなかった。

特徴的な所見として、年長児群の 33%が初期診断として頸部リンパ節炎として診断されており、対照群（4.2%)に比べて有意に高かった。また年長児群において、川崎病と診断するまでの期間は、対照群に比べて有意差はないものの遅い傾向にあり、γグロブリン投与開始日は、わずかであるが有意に遅延しており、診断がより困難であることを示していると思われる。ただし、2 つの群において、冠動脈病変の発生率には有意差は認められなかった。

＜結語＞

年長児における抗菌剤不応の頸部リンパ節炎症例では川崎病の可能性を念頭に置き診療を行う必要

がある。また今回の検討では有意差がなかったが、年長児の川崎病発症例は冠動脈病変のハイリスクであり、できるだけ早期に川崎病と診断し2g/kgの大量γグロブリン投与することで冠動脈病変の発生を予防できると思われた。

なお、この学位論文の内容は、以下の原著論文に既に公表済である。

Eiichi Yamamoto, Takashi Higaki, Takeshi Nakano, Ryusuke Watanabe, Kyoko Konishi, Yoshihiro Takahashi, Yasushi Ishida, Eiichi Ishii：Jacobs Journal of Pediatrics　2（1）:012-018,　2016